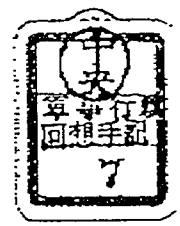


1 / 37部

昭和二十二年七月 記述

西浦進回想録(越し方の山々)



複製史料

防衛研修所戦史室

所管争いは色々あつたが面白かつたものを二、三

北支軍団司令部が各隊を割り附け始めた。陸軍省のどの隊が担任するかという事になつた。馬隊等は
普通といふ隊で、馬隊等は細路自分の処へというし、文相隊は各兵の本務というので流らなかつた。當時
の馬隊の官制には「馬隊馬隊」とあつて、大抵かう守はなかつた。どうとう大馬隊に含まれるという
ことに大臣の規程をこつて馬隊隊で担任することにした。当然のことながら大馬隊なりという字句に關係
しての争ひだつた。その後官制改正で馬隊隊は「馬隊隊」という事になつた。

もう一つ、支那事變の始め、慰安隊が始めてあつた。中央における慰安隊は、陸軍省が
いうことで一隊があつた。軍部組織といふ話からいへば兵部、文相といふ事からは兵部、陸軍省が
陸軍省、何れにも属せざる事柄とすれば官制、といふので大分議論があつたが結局兵部あたりで内地の
陸軍省に属することになつた。

所管について一寸懸念のは船給の條用契約が建築課が主務でやつていたことは、關係者以外には知らな
いことだらう。陸軍省の經費が兵器費なりや建造費なりやといふことも可成り問題となつた。給水が軍医
部と陸軍省の大紛争だつた。

次に支那の長城をめぐつての所管争いについて、蒙疆地区は支那事變の始めの頃東軍が滿州国、滿鐵を
統制して所屬東軍兵団を以つて一學文隊した事であり、次いで蒙疆兵団となり其後軍となつたが、其の
所屬東軍の申し立てであつて、北支軍の隷下になつても善事に余りその本家に引いては、平津地区とは政
治経済的にも非直對正があつて、北支方面軍の手筈に完全に入るものには相當の日子を必要とした。

その對立時代色々命ことがあつたが、蒙疆にそれを感じていた長城線の長城そのものが何れに屬するの
といふことで問題となつた。大して問題のなさそうではなかつたが可成りおつれて中央まで持ち込まれて
きた。双方言ひ分があつたが、元來長城線は海防に對し中華を守るためにつくつたものだから北支軍のも
のだといふ北支軍の言ひ分が一筋筋が通つていふように思われた。尚事變の始め北支方面軍は新に帥領せ

られたもの、東軍兵団の方は關東軍、滿州國等の親領の非親とよりすぐつたものなので、何かにつけ蒙疆
の方は手廻しよく、すばしこいものだつた。

北支方面軍の兵站捕給線は天津から遼寧地方へ、北平から蒙疆地方へ及び蒙疆方面と三方面へ伸びて
いたが蒙疆方面は帥々要領よくさばくので、物乞之にはかり流れて用るといふ話をきいた。

50 旧來の悪習

所管争いでもはかひがらうが、關東軍の運集業務にあつた問題を感じ出したので書いて見る。従来
第一部隊の征伐地にも必ず陸軍病院があつたが、しかもその隊にも医務室がある。まことに重疊したこ
とで、部隊と隣接しているときさの如き殊に然りである。それで私が言ひ出して之を一つにするにしよう
と、矢張り旧來の色々の習慣規則を指に仲々これを實現するまでには医務局方面を説得するに苦勞した。

又この反對で数この小さい自動車部隊が集まつた征伐地で修理施設を台員で完全なものをつくらうとし
ても、これも實現までには可成り苦勞した。或は又中隊以下の独立部隊が数ある場合、これら諸施設を一搦にして各隊勤務を共同化するものも仲々
難儀しないことだつた。

51 在滿家族の医療と教育

滿州の兵力増強に伴い長期滿州勤務の將校以下がふえる。それでは官舎の建築を促進して家族携行を許す
ことに努力したのは前述した通りであるが、これと共に家族の医療施設と子弟の教育施設とに關しても
の持論で各力面を説得するのに可成り骨を折つた。陸軍病院に家族診療を委ねる認めをすことについて